

# ある探偵の独り言 2

naoyama1219

南野と俺は馴れ合えない仲だ。

何度セックスしようが口げんかをしようが、その果てにどちらかが病院に行かなきゃならないほどの殴り合いをしようが、互いに心のどこかを預けているくせに、馴れ合うことが出来ない。

俺は素直じゃない。

たぶん南野だって素直じゃない。

奴は時折、人を所有物のように扱うし、露骨な言葉遣いで女扱いしたりして俺を激怒させるが、本当はその言葉全部に深い理由があるらしい。時々、何気ない日常の中で「そうなのか」と奴の真意を悟って、ひどく驚くこともある。

だけど俺は、奴が見せる感情の機微を感じ取るなんて器用な真似はほとんど出来ないし、言葉で言われたって気づかないような鈍感だ。素直に聞けない俺が悪いのか、遠回しに言う奴が悪いのか、どっちとも言えないが。

たぶん奴は、どこかで俺がわかっていると思っているんだろう。

南野が考えていること、奴が感じていることを。

だけど俺にはわからない。

どうしてわからないのかと迫られたって、奴の考えていることなんざ、これっぽっちもわかりやしねえ。

ある朝は、奴は俺が憎いんじゃないかと思う。

ある夜は俺を慕っているんじゃないかと思う。

そんな事の繰り返しだった。

あの日までは。

俺は少なくとも三度、死にかけた。

一度はガキの頃。

自転車で車道に飛び出して、文字通りぶっ飛ばされて入院し、幸いなことに頭のねじは飛ばなかったが、かろうじて手術に成功した右足が少しだけ不自由になった。

そのハンデを克服しようと運動にがむしゃらになったのが中学の時。

サッカーと柔道、剣道を周囲に呆れられながら掛け持ちして、剣道部では主将を務めた。高校の時は真剣にも手を出した。学校には居合い部がなかったので、電車で駅で四つほど離れた道場に通り詰めて、二年生の時に部を作った。

大学の時は、すでに足の不自由さもわからなくなっていたので、当時、なぜか夢中になっていた経済を選考した。

だが当然と言うべきか肌に合わず、他に何かないと探していた二学年の秋、ひよんなことで知り合った所長のお節介で私立探偵のアルバイトを始めた。

バイト料は安かったが、否応なくむき出しになる人間性と繰り広げられる本物のドラマに、心惹かれたのだと思う。

その、直後だった、まだ中学生だった南野に腹をかっさばかれたのは。

こいつが死にかけた二度目だ。

あまりに出血が多く、二週間近く生死の狭間をさまよい、目を覚ましたのは「奇跡」だと評さ

れた。俺はそんなことはどうでもよかった。加害者の南野が少年院に送られたことが、辛かった。

三度目はつい三ヶ月前。

引き受けた当初から嫌な予感を覚えていた依頼だった。依頼人から提出された書類やこちらで集めた情報に危険を感じさせるものは一つもなく、数多く寄せられる中でも珍しくもない行方調査のようだった。

だが俺は、情報を集めれば集めるほど強まる正当性が気に入らなくて、部下に預けていた依頼を取り上げて独りで抱え込んだ。不思議がる南野をあえて出張で北海道まで飛ばした。

未だに何故なのかは分からない。

昼食を取りに寄った喫茶店の、狭い階段で突き落とされた。

運悪く頭から落ちて頭蓋骨骨折。

今度は二ヶ月近くも生死をさまよい、目覚めたその時、記憶が欠損していた。脳の一部が出血によって圧迫され、その出血を取り除こうにも場所が悪いらしい。

未だに俺の記憶は欠けている。

探偵の仕事に支障はないが、人間関係に問題があるとわかったのが、退院の日だった。

俺は南野とどうして身体の関係を持ったのか、まったく覚えていない。

そのことが発覚したあと、二人だけで記憶のすりあわせを試みた結果、俺は奴に関する多くのことを忘れていて、それは仕事や他の人間関係などよりもよっぽど多く、しかも肝心なところが抜けているらしかった。

らしい、というのは、南野が言わないからだ。

奴はあれ以来、すっかりふて腐れて俺の側に近寄らない。

記憶が無くなる以前のように、人の家にふらりと現れてコンビニの袋を見せることもなく、仕事と称して一緒に居残ることもない。時折、唐突すぎるほどの勢いでぶつけてきた感情の露出もなくなった。

一度、退院した夜にいきなりキスされて以来、奴は俺に近づかなくなった。

今じゃ優秀な部下だ。

以前は少しだけわかっていたかも知れない南野の考えが、今では本当にわからなくなってしまった。

奴はわかってもらう気もないんだろう。

だが、俺から近づくには、セックスの記憶があまりに生々しすぎる。ひしゃげた記憶の中で奴は俺のなけなしの自尊心を傷つけるほど手酷かった。おかげで以前は平気で出来ていた簡単なスキップも出来なくなって、会話自体もほとんどない。

他の部下たちには、記憶に欠損のある俺を南野が信頼していないように見えるらしく、あらゆる方向から気を回して、信頼を取り戻させようとしているようだった。だが南野にもその気はなく、俺は申し訳ないと思いながら、未だに奴に近寄ることさえ躊躇われる。

所長には出向を持ちかけられている。

以前、ある調査で知り合った会社の幹部が俺を気に入って、どうしても社内調査を任せたいらしい。

俺にはまだそんなことは出来ないし、早すぎると何度も断ってきたが……、近いうちにこちらから頼んでしまうかも知れない。南野との気詰まりするような毎日から逃げるためだけに。

そんな自分が嫌だ。

吐き気がするほど嫌いだ。

だが、いつまでも南野とこんなことを続けていたら、俺は奴をダメにしてしまう気がする。まだ南野は若い。所長に言わせたら俺も若いかも知れないが、俺は奴の将来の方が気にかかる。

せっかくどぶの底から這い上がってきたんじゃないか。自分だけの力で生きられるようになったんじゃないか。

もっと自分を大切にしろと、殴りたくなる。

だが今の俺にその資格はない。

南野。

俺はお前のことが分からない。

そのことが辛いと思ったのは、初めてだ。

山崎さんは幾つもの記憶を失った。

当人にしてみれば仕事に支障がないのでさほど気にならないらしいが、失っている記憶の殆どが俺に関するものである以上、どうしても俺は山崎さんの順調な回復を素直に喜べなかった。

これほど恩のある人なのに。

よかったですね、の一言もかけられない自分が嫌だった。

だが何が一番嫌だって、もしかしたら山崎さんは、今回のことをいいことに俺との関係を断ち切ろうとしているのではないかと考える——その瞬間が、一番、嫌だった。

確かに俺は山崎さんを抱いた。

一度、セックスしたことを逆手にとって、何度も抱いた。

やり口も行為も強引だったし、山崎さんにしてみればどうしていきなり、五つも年下の部下に強姦されたのか、わからなかっただろう。実際に山崎さんは「お前、男しか駄目なのか？」なんて聞いてきたほどだ。

だがそれでも仕事を辞めさせるわけでもなく、今までの付き合いを断ち切ることもなかったのは、実に山崎さんらしいと言えた。

あの人は一度でも懐に入れた人間を拒まない。

何があろうとも信じようとする。

普段の粗野な行動からは信じられないほど、信頼の置き所が深い人なのだ。自分の腹を割り裂き、なおかつ人を殺した俺なんかを気にかけて、出院後に仕事を世話してくれるような情の深い人だ。

だけど、そんな人が、俺の存在を、あの人の中から断ち切ろうとしているのかも知れない——。

いくら被害妄想だと言いついても疑念がぬぐえなかった。

湧き上がる疑心を抑えきれない。

声をかけて振り返ったとき、それまで浮かべていた笑みを引きつらせるあなたを見て、触れようとしていた手を引っ込める姿を見て、話しかけようとして口を嚙むあなたを見て俺は一つずつ殺意を重ねていく。

殺意だけが積み上がる。

感情に、出口がない。

俺はいつか山崎さんを殺してしまう気がする。

それが怖くて、二人きりになれない。

近くにも寄れない。

あなたを殺したくない。

だが、殺してしまいたい夜もある。

そんな夜はひどく長い。

入院していた間は南野と水野さんが主任を代行してくれていたが、俺がちょっとばかり社会から遠ざかっていた間に、探偵業の需要が異様に高まったようだ。

前年と前々年に比べて、仕事量は格段に増えている。

依頼数も増加の一途だ。

仕事が多いと感じる一番の理由は、病院でただただする休日に慣れきった俺にあるのだろう。

だが、呆れるほど不況だと騒いでいた新聞も景気の持ち直しを取り上げはじめ、探偵にまで小銭が回ってくるようになった気もする。

他の影響として探偵を取り上げるテレビ番組が増えたこともあげられるだろう。

一番多い依頼は、もちろん、不倫の素行調査。

次はストーカーだ。

正直なところ、不倫だのストーカーなどには、俺だってうんざりだ。

依頼人が「俺の妻が…」なんて持ち出した瞬間、その場から逃げたくなることもある。

だがそれでも、依頼人とじっくり話し合っていくうちに、単なる不倫の案件は名前を持った個人の出来事となって、彼、もしくは彼女のために俺に出来ることがあるのなら、と思えるようになってくる。

だがある程度以上は、深入りしない。

あくまでも探偵と依頼人。

時には突き放せる距離も必要だ。

その距離感が掴めなくて辞めていった人間を何人も知っている。

——俺は少なくとも三人の部下を、この仕事に向かないからと辞めさせた。

人に冷たくとも、人に優しすぎてもいけない。

探偵ってのは因果な商売だ。

「山崎、ちょっといいか」

「あ、はい」

一気に飲み干してしまうつもりで傾けていたお茶のペットボトルをおろして、俺は口端を拭いた。傍らに立った水野さんは少し疲れた顔で足もとを見ている。こっちへ、と促しながら個室のドアを開けて、先に老探偵を通した。

机を挟んで座りながらペットボトルのふたを閉める。

「あー、水野さん。もしかして俺、なにかやりましたか……？」

「お前のことじゃない。柳のことだ」

一瞬、ほっとして良いのか困ればいいのか、わからなかった。俺のことじゃないのはたぶん喜ぶべきことなんだろうが、……柳も俺の部下だ。

持て余したペットボトルを机上に置く。

「駄目ですか、柳は」

水野さんは苦虫を噛み潰したような顔になった。

「そうは言わん。若い頃なんてのはそんなもんだと俺も思う。だがな、お前が入院している間に相談者が自殺未遂を起こしただろう。どうもあれが効いてるらしい」

「ええ、話は聞いてます。結局、同居人が異変に気付いて未遂の未遂で終わったと報告を受けましたが……」

「本人も衝動的だったと認めて終わったが、柳は自分が気付いていれば止められたんじゃないかと思っているらしくてな。実害は何もなかったし、これからその経験を生かせばいいと何度か言ったんだが……」

「……そう、ですか」

探偵というのはいわば逃げ込み寺でもある。

不倫やストーカー、もしくは不安や恐怖に追い詰められたからこそ、依頼人は探偵に依頼しようと思いつのだろうし、相談にも来るわけだ。

その人間が衝動的に自殺未遂を起こす可能性だってないわけじゃない。

現に、俺の元上司、探偵暦の長かった秋山さんも何気ない一言で、依頼人を自殺に追い込んでしまった……。

なんとなく置いたペットボトルを見る。

残りは少しだけ。

「わかりました、水野さん。俺も柳と話してみます。……彼は理想が高いんですかね？」

「いや、単に真面目なんだろうな。流せば良いところを真面目に受ける。いっそ、お前みたいに暴力沙汰を起こしてくれた方が楽だ」

ずいぶん引っかかる言い方だった。

水野さんを見やると、ほんの少しだけ、笑みを浮かべている。

「……それって褒められてるんですか？」

「今は、やるなよ。お前だってもう若いって年じゃないんだ」

少しなら認めてはやるが褒めてはやらない、ということだろうか。あまりにも心当たりが多すぎて反論も出来ず、苦笑しか漏れなかった。

あの当時にご迷惑をおかけしました、と軽く頭を下げて、立ち上がる。

水野さんも膝に手を掛けてゆっくりと腰を上げた。

「お前、これから書類仕事か？」

「いつものように調査報告書の添削ですよ。現場にいつ出たのかももう憶えてません」

「頑張れ。それが主任ってもんだ」

慰めるように二度、肩をぽんぽんと叩いて、水野さんは小さな部屋を出て行った。

主任、か。

責任の重さを十分に理解した上で引き受けたつもりだったが、やっぱり、荷が重い……。

——とくに今の俺には。

このところ、すっかり癖になってきたため息を漏らしながらドアを押し開く。脇からいきなり影が飛び出してきて、慌てて「すまん」と身を引いた。

改めて見ると、そこで立ち立ち止まっていたのは、間が悪いというかなんつーか、……南野だった。

「こんなところに居たんですか。探してたんですよ」

思わず顔をしかめた俺に気付いただろうに、優秀な補佐は気付かぬふりをして、一枚のメモを見せてきた。指先でつまんで顔の前に持ち上げる。——はぁ？ 報告書の送り先を間違えた、だと？

「ホントか？ これ」

「わざわざ嘘を報告する必要がありますか？」

「……あ、いや、すまん」

たぶん南野は軽口のもりだったんだろう。何となく責められた気がして謝った途端、五歳も年下の補佐は不意を突かれたように俺を見下ろし、なぜか一步、後ろへ下がった。

なぜかわからずに南野を見る。

俺よりも少しだけ背の高い南野は、表情を押し殺したまったくの無表情で俺を見下ろしていた。

——気が付いた時には、もうすべてが、遅すぎた。

思わず顔が歪む。

なんでこうなるんだ……？

「それでどうするんです？ まずは謝罪が先だと思いますが」

南野が言いながらすいっと顔を逸らした。俺の手からすばやくメモを回収して廊下の奥へとあごをしゃくる。

「すぐに三宅さんも戻ります。まずは何を？」

「……双方にアポを取ってくれ」

ぎくしゃくとうつむきながら、後頭部の傷の辺りを撫でた。

しっかりしろ、集中するんだ。

俺は主任なんだぞ——。

「とりあえずは俺が謝罪に出るが、それでも駄目なら所長にも出て貰わなきゃならないだろう。お前は三宅から詳細を聞いてくれ。俺は所長に報告する」

「わかりました。車は押さえますか？」

「無理ならタクシーで行く」

「はい」

軽いうなずきを残して、南野はすばやくきびすを返す。……徹するという面じゃ南野の方がよっぽど大人だな。俺は妙に息苦しい。襟元をゆるめながら強く奥歯をかんだ。

……その一瞬、脳裏を過ぎったのは、今まさに出てきた部屋で奴にやられてる光景だった。

「！」

きつく目を閉じる。

ねっとり胸を舐められた感触までよみがえってきて背筋が震えた。

「……しっかりしろ」

囁き、緩めた襟元を元に戻す。

持っていたペットボトルを廊下のゴミ箱に放り込んだ。

俺は主任なんだ、と何度も言い聞かせながら、背筋を伸ばして所長室に向かった。



ねえ南野さん、と斉藤の呼んだ背中が硬直した。

車のキーを持ったままの南野はいかにも嫌そうにこちらへ顔を向ける。

「なんですか？」

ほとんどの調査員よりも年下の南野は敬語が癖になっている。廊下越しに低く問うて、こちらに身体を向けた。——斉藤が声も高く喜んでるんだから理由くらいわかっているだろうが。

「今から主任と堀内さんと飲み行くんだけど、南野さんも一緒にどう？」

「……いや、オレは」

「来いよ」

俺の一言に南野は硬直した。

いつものしかめっ面になり、手中の鍵をもてあそぶ。

躊躇している様子に、斉藤が薄茶色の細そうな髪を掻き上げながらにっこりと微笑んだ。

「行くでしょ？ もちろん。二十歳を超えてるんだから酒くらい飲めるわよね。同僚との飲み会を断るなんてバカのやるだものね？」

滅多なことがない限り、俺は彼女の言葉に口を挟まない。調査方法にも手を加えない。斉藤えり子は俺が出会った中で最強の女だからだ。

斉藤の言葉に南野は渋々と観念したようだった。

「……行きます」

「いい子ね」

「それじゃ、あたしは堀内さんを送っていくわ。ホントにこの人ってば酒に弱いよねー。明日、弄って遊べそう」

「……あんまりいじめてやるなよ？」

六本木にまで飲みに出たのは久々かも知れない。

ほろ酔い加減のいい気分で、俺は堀内をタクシーに押し込んだ斉藤を見た。彼女はほんのわずかに頬を上気させているが酔った雰囲気は微塵もない。

ウェーブのかかった細い髪に、小振りな顔。華奢な首。……本当にいい女だな、こいつ。

「あら？ あたしはそんなにヒドい女じゃないわよ。ちゃ〜んと南野さんのこと潰さなかったでしょ？ ま、主任のことは諦めてるんだけどね。強すぎるもの」

斉藤は艶やかにいたずらっぽく笑った。

——まったく、こんなにいい女なのに、どうしてこんな性格なのかな。

俺は笑うしかなかった。

「何があっても、お前にだけは潰されたくねえな〜」

「そう？ あたしは潰して襲ってみたいけど。禁欲的なあなたの雰囲気、結構好きよ」

「……一応、ありがとうって言うておく」

「じゃ、また明日。今日は楽しかったわ。南野さん、また飲みましょうね」

するりとタクシーの助手席に滑り込んで、斉藤はヒラヒラと手を振った。肘でド突くと横に立っていた南野がのろのろと手を挙げる。ふたりに手を振って見送った。

周囲は酔っぱらいで一杯だ。

赤いテーブルランプは一瞬で同じ光に飲み込まれた。

風が少し冷たい。

「——見たか？　ひとりでワイン一本を開けたぞ、斉藤の奴」

「カクテル十杯は飲んでましたね。どうなってるんですか、彼女の肝臓」

彼女の酒豪っぷりに思わず南野と顔を見合わせてから、こんなに近くで顔を合わせたことが久しぶりだと気づいた。恐らく南野も同じことを思ったのだろう。ふっと目を背けた。

歩道に戻りながらちらっとこちらを見る。

「どうします？　タクシーで帰りますか？」

「あ～、そうだなあ」

斉藤は飲み会での煙草を嫌がる。我慢していた煙草を急いで取り出し、火をつけた。肺まで深々と吸い込んで吐き出す。

「もう一度飲み直すか？　お前、食べてばかりで飲んでないだろ」

「——飲みましたよ。充分です」

「そうか？　ならいいが」

南野はまっすぐ前を見たあと、足取りをゆるめて隣に並んできた。

「飲み足りないんですか？」

「いや……、こんなもんにしとかなないと、あとが怖いからな。千鳥足で転んで頭でも打ってみろ、所長に殺されるし、病院であの怖い女医さんに何を言われるか知れたもんじゃない」

「そうですか」

どちらとも、どんな手段で帰るとも言わないまま、人の溢れる歩道をのろのろと歩いた。

俺は煙草を吹かしながら酔いに身を預ける。誰かと楽しい酒を飲んだのは本当に久しぶりだった。気兼ねすることなく、身構えることもなく全部がするすると流れて、今は心地よさだけが残っている。

——仕事もこういう風に、上手くいってくれたらな。

南野とぎくしゃくすることもなく、さ。

煙草を携帯灰皿でもみ消した。

「山崎さん」

「……どうした？」

南野の手が、腕を掴む。いつの間にか奴は立ち止まっていた。俺が振り返ると手を離しながら気むずかしげな顔になる。

「どうやって帰りますか？」

「あ、……そうか、お前、事務所に車か」

「酒を飲んだら乗るなは常識でしょう。車はいいんです」

「そうか？　あ、……お前の部屋、ここから近いのか」

確か乗り換えても一時間以内に帰れるくらいの距離だ。俺は思わず苦笑して、タクシーを目で探した。

「悪いな、意味もなく付き合わせちまって。タクシーで帰るわ」

「……ええ。タクシー、止めましょうか」

「いや——」

止める前に、南野は車道の方に歩いていった。気が早い。俺は二本目の煙草を取り出しながら南野の後ろに立つ。数台をすぐ横からさらわれて、一台に見事に無視されて、南野はようやくタクシーを捕まえた。運転手が開けたドアを固定しながら俺を目で促す。

まだ長い煙草を、もみ消した。

懐から財布を取り出して万札を抜き出す。

「南野、これ、とっとけ」

胸に押しつける。

「……なんですか？」

「あの割り勘はやっぱおかしい。斉藤ばかり飲んでたからな、ほとんど飲んでねえお前が払う必要はねえだろ」

「普通、飲み会は割り勘でしょう。おかしくないですよ」

「いいからとっとけ。俺が納得出来ねえんだ」

「山崎さん」

拒む南野のポケットに、ねじ込む。嫌がった南野は俺の腕を掴んだが、もう遅く、札はポケットに入ったままだった。俺はタクシーに頭を突っ込む。乗り込もうとしたところを、腕を引かれシャツの胸ぐらを掴まれた。

金を返そうとしているのかと思い、「お前、受けとれって——」と言いながら顔を上げたところで、唐突に唇を塞がれる。ほのかにワインの薫る舌に口内をざらりと舐められ、乱暴に突き放された。

は？

何だ、今の。

南野はいつもの無表情。

「——お客さん？ 乗るの、乗らないの？」

苛々した運転手の問いに我に返った。

「あ、乗ります、——乗ります」

慌てる俺を南野は丁寧に人のシャツを整えてから、タクシーに押し込んだ。首筋が火照っている。運転手に住所を告げながら、思わずミラーを伺った。どうやら運転手は見えていなかったらしく慣れた仕草で車を操る。

ワケがわからなかった。

なんだ、ありゃ？

——なんでキスなんかしやがった？

あいつ。

南野の徹したような無表情を思い起こして、身体が熱くなる。

ワケがわからないなりにきに赤面しているのがわかった。

身体が熱い。

「お客さん、具合でも悪いの？」

「……なんでもない。ちょっと飲み過ぎただけだから」

「そう？」

金を払って、降りる。

その頃には落ち着いてきて冷静な対応が出来るようになっていた。運転手に「気をつけてな」と声をかけてきびすを返し、ふらふらと歩き出しながら、うっすらと先ほどから気づいていた事を俺は渋々と認めざるを得なかった。

南野に触れられて、嫌悪感がどこにもなかったことに。

あの嫌な記憶がよみがえることもなくて、思い起こせば飲んでいた間も会話はスムーズで違和感がなくて、……奴の存在はとても自然だった。

側にいて当然。

そう、……怪我をする前は、それが当たり前だったのに。

——奴の舌が香っていた。

最後に飲んだ、白ワインだろうか。

俺はその晩、寝るに寝られず、まるで風邪を引いたように火照る身体を持って余しながら書類整理に全力をぶつけた。

なぜ俺が喫茶店の階段から突き落とされたのか。

俺の事件を担当した刑事、警視庁捜査一課、安曇敬一郎巡查部長は未だにその理由を探しているらしく、事務所に何度も足を運んできた。

俺は刑事という職業を選んだ男は嫌いじゃないが、やっぱり好きにもなれない。事務所にも足を運ぶ時間がないという、ある有名作家の実家へ依頼を伺いに出向いていた俺は、いきなり所長に呼び戻され、ほとんど激怒しながら事務所に戻った。——刑事という職種は人の都合など気にしない、それが好きになれない、一番の理由だった。

確かに俺だって理由は気になる。

だが深追いする気はなかった。

命が助かっただけでも幸運だったのだから。

「もうこれ以上は協力できない。勘弁してくれませんか」

安曇が通されている部屋のドアを開けるなり、俺は少々不躰に協力を断った。すると、たぶん俺よりも若いだろう安曇は慣れっこになった上目遣いで睨み付けて、ゆっくりと背筋を正す。

俺ではなく真っ正面を見つめた。

「それは困ります。協力してもらわなければ。歴とした殺人未遂なんですから」

「俺は生きてるからいいでしょう」

「そういう問題じゃないんです。私も暇だからここに足を運んでいるわけではありませんよ」

あー、こういう生真面目で型にはまったタイプは苦手なんだよな、ったく。

ため息を吐きながら個室に入り、ドアを閉める。

前回、安曇が来た時に頼まれたファイルを机の上に置きながら、刑事の差し向かいに座った。

「これが今まで、俺の関わってきた案件の概要です」

「……依頼人の居場所がわからないような案件は他にありましたか？」

「いいえ。支払いの滞っているものはいくつかありますが、それはまあ、税金でも給食費でも一緒でしょう。それはこの部屋から持ち出さないでください」

安曇はあからさまに清潔そうな顔を歪め、また、睨み付けてくる。

俺は両手を見せながらソファの背に寄り掛かった。

「守秘義務があるんですよ。メモを取ってもらってもかまいませんが、そこには依頼人の名前も住所も調査対象も書いてありませんし、もちろん、案件の内容について聞かれても答えられません。あしからず」

「……また襲われても知りませんよ？」

「そんなにご心配でしたら一筆、残しておきましょうか？ 私は警察に協力を拒んで自分から死にました、とでも」

これはさすがに悪い冗談だった。一瞬、絶句した安曇は視線をさ迷わせ、ため息を落としながらファイルを取り上げる。俺は気まずい思いで後頭部を撫でた。

「それより教えてくださいよ。何かわかったことはないんですか？」

「……新展開はありません」

「ひとつも？」

「あればお知らせするとお約束しました」

ぶすっとした顔でぶっきらぼうに言って、若い刑事はファイルの閲覧をはじめた。俺は冷め切ったコーヒーの入ったカップを取り上げて喉を湿らせた。

——殺人未遂、か。

そう言われてもいまいちピンと来ないが、階段が急傾斜であったこと、俺の背広の背中に両手で強く押した痕跡が残っていたことなどから、警察はあれを殺人未遂だと判断したらしい。

他にも現場から逃げ去る人影が複数目撃されたというが、いずれも風体ははっきりしておらず、男だ、という程度だった。

俺の周辺を調査した結果、警察は事件を仕事がらみの怨恨だと断定して——俺の交友関係は広く浅くて、すぐさま殺意に繋がるような話は幸いなことになかった——、俺の関わった案件を片っ端から調べたらしい。

らしいというのは、俺の意識が戻った時には、発端となった案件がすでに判明していたからだ。

それはありふれた行方調査の案件だったが、事務所まで足を運んできた依頼人の名前も住所も電話番号もすべてでたらめで、行方調査の対象となった女性にも怪しい点は何もなかった。それどころか、彼女はなぜ自分が調査されていたのかまったくわからなかったと、安曇は言っていた。

俺自身、なぜあの行方調査を独りで抱え込んでたのか、よくわからなかった。

——ツンと脳の奥が揺れる。

気のせいだろうが後頭部の傷が痛んで、何となく、その辺りを撫でた。

「……記憶はすべて戻ったんですか？」

いきなり問われて、顔を上げる。

安曇が心配そうに眉根を寄せていた。

俺は軽くかぶりを振る。

「いいえ、まだ戻ってはませんが仕事に支障ありません。今のところは何も問題もないですし、身体も元気ですよ」

「そうですか」

問題がないことをわざわざ強調している自分に気付き、苦笑する。何となく取り出した煙草の箱を机上に乗せて足を組んだ。

安曇が見ているファイル。

紙自体の厚みは一センチもない……。

たったそれだけに、俺の探偵としてのすべてが詰まっているんだと思うと、なぜか笑みがこぼれて止まらなかった。

たかが一センチ。

されど一センチ、か。

ぬるいコーヒーを一気に飲み干して、立ち上がる。

「何かあったら呼んでください。手が空いてればすぐに来られますから」

「ええ、お願いします」

安曇は何かを黒い手帳に書き入れながら上の空でうなづく。コーヒーのソーサーを持って、依頼人などと打ち合わせする個室を出た。

——殺人未遂、な。

南野のことも含めると、俺は今まで二度も殺されかけたことになる。いや、高校時代のあれがもしも本気だったのなら三度だ。三度も、だ。もしも何かが一とつ違っていたら俺は死んでいた。

この胸の鼓動も、この手も、この足も。

ここにはなかった。

「山崎主任」

俺が、死んでいた……？

妹の美沙はたったひとり残されて、俺の机には誰かが——たぶん南野が——座っていて、骨だけになった俺は墓の中、火葬の熱もすっかり冷え切っている頃だろうか。

「主任？」

……やっぱり俺は少し変なのかも知れない。

死んでいたかも、いや殺されていたかも知れないのに、俺を殺さなきゃならないと思いつめた人間が居る——居たというその事実が、とても悲しかった。

「どうした、山崎」

ソーサーを持っていない腕を軽く引っ張られて、我に返る。宗田さんと三宅が不思議そうに俺を見ていた。

思わず苦笑いを浮かべる。

「いえ、なんでもありません。急に時間が空いたんで何しようかって考えてたんです」

「お前のぼんやりはいつものことだが、度が過ぎると事件の後遺症だと疑われて病院に担ぎ込まれるぞ。気をつけるんだな」

俺の肩を叩いた宗田さんはにやっと笑いながら背を向ける。……ホントに口が悪いな、まったく。後ろ姿を睨み付ける俺に傍らから三宅がやけに分厚い報告書を差し出してきた。受け取り、最初のページをめくる。

「お疲れさん。指示した箇所は全部直したか？」

「はい、直しました。ただその、……主任、途中から別の報告書と混じってました」

「別の報告書……？」

ページ数の部分だけを見ていくと、確かに途中で数字が戻ってる。——そりゃ分厚いはずだ。ため息混じりに報告書を閉じる。三宅を促して歩き出しながら彼の肩を叩いた。

「悪かった。まずは軽く休憩して気分を入れ替えて、それからお前の報告書を探すのを手伝ってくれないか？」

「ええ、わかりました」

前ならこんなミスは絶対にしなかったのに。

三宅の有り難い返事を聞きながら、俺は自分の情けなさにため息も漏らせずにいた。

それから二時間ほど薄いファイルと格闘して、安曇はなぜか満足そうに帰って行った。

彼が来た日の予定はいつも未消化のまま終わる。

——俺は自信を無くしつつあった。

南野とは相変わらずぎくしゃくしていたし、あり得ないようなミスを繰り返す上に、たびたび病院へ足を運んでいたため、部下への指示が十分に行き届いていない気がしてならなかった。正直なところ、彼らから不満が出ないのが不思議で仕方がない。

たぶん彼らは俺を信じてくれているんだろう……。

その期待にいつまで経っても応えられないことが、何よりも、歯がゆかった。